

我が国における 町並み研究の過去と現在



法政大学
建築計画研究所

板倉文雄

我が国において「町並み」という言葉が、具体的な意味と背景をもって登場したのは、そう昔のことではない。「町並み」という言葉の定着は、一九七五年、文化財保護法の改正に際して、「伝統的建造物群保存地区制度」が新たに制定されたことに始まるというと思う。この制定によって公法上の措置を伴って、町並み、集落等の伝統的環境の保存問題が具体的な展開をはじめることになり、私たちが歴史的に築きあげてきた生活環境の現状も問われることになったのである。

もっとも、それ以前においても、建築史における住居史の研究、民俗学と結びついた民家の研究、住宅改善運動の一環としての住宅調査等が行なわれてはいた。この流れの中にあつて、建築史家を中心にして進められた作業の成果は、文化庁監修によつて、一九六七年に初版された『民家のみかた調べかた』等に見ることができる。また、同書の編集にたざざわつた、太田博太郎、伊藤ていじ、大河直躬といった諸氏によつて民家の復原の技術や修復の手法も確立されてきたのである。

このアカデミックともいえる動きは、一九七六年になると秋田県角館町、長野県妻籠宿、岐阜県白川村、京都産寧坂、祇園新橋、山口県萩・堀内、萩・平安古の七ヶ所が「町並み保存地区」として、我が国最初の「伝統的建造物群保存地区」に選定されるまでに至るのである。しかし、当然のことながら、選定地区にはいずれも多くの住民が生活を営んでおり、選定によつて地区の管理費や修理費に国からの補助がある半面、選定によつて自由に建物の取り壊しや改築ができなくなるなり、さらにネオンサイン、アンテナ、クーラー、広告物などの設置についても、市町村や国の指導、発言が及ぶこと

になり、文化財行政と住民との間の利害調整等の新たな課題を生み出すことになったのである。また一方では、住民側の要求によって保存運動が展開した例もあった。一九六四年、鎌倉の八幡宮の裏山が「風致地区」にもかかわらず、宅造によって破壊されようとした時の鎌倉市民の運動がそれである。この成果は、一九六六年「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」の制定に結実することになった。

多様な側面をもって生活環境の保存運動が展開した七〇年前後の状況ではあったが、町並み保存、町並み研究が時代のテーマとなる背景には、もう一つの動きがあったといっている。

我が国の経済が、高度成長期にあった六〇年代の動向である。この時期、東京、大阪の二大都市圏は急激な拡大を展開する。東京中心の生活様式、消費文化が全国の隅々にまで波及し、地方の個性的文化は喪失の危機に直面していた。各都市の伝統的町並みは破壊され、画一的な商店街、オフィスビルが建ち並びはじめた。それと同時に、自然の景観や田園風景が失なわれてゆく。特に一九六四年の東京オリンピックのもたらした影響は大きい。都市の変貌、楽天的な対応が無謀な近代化を促進する。河川は無造作に埋め立てられ、高速道路が中空を横切る。都市域の急激な拡大は、歴史的に築きあげてきた都市の形態や構造、都市の景観を急速に変化させる。この動きは一九七〇年の大阪万国博覧会にまで引き継がれてゆく。建築デザイナーを中心としたメタポリズムの主張も、都市の成長、変化を都市組織の正確な読み取りもないままに讚美し、この時期の理論的支柱の役割を果たす。こうした規制のない自由な建設活動は、確かに幾つかのすぐれた近代建築を産み出したものの、その結果、総体としての都市と

その生活環境の間の有機的な親和関係は悪化し、都市も崩壊の危機に直面した。しかし、六〇年代後半、没個性的な風景が産み出されてゆく状況下、他方では、経済合理主義一辺倒の都市・建築・生活環境の近代化への疑問が提出される。失なわれゆく人間関係、地縁文化の再生への期待、調和のとれた建築形態と人間関係を持続させているアノニマスでヴァンキュラーな集落への憧れなどがそれである。ノスタルジックな想いが、デザイナーサーヴェイのブームを呼び、高密度でありながら親和的なコミュニティを築きあげた漁村、環濠集落、農村集落、峠の宿場町、地方の城下町……魅力的なヒューマンスケールを追い求めている調査が若き建築家たちによって記録される。また、京都などの町家群、町中に成立しているコミュニティ、人間関係の分析も進められる。奈良、金沢、高山、倉敷、萩、津和野、室津、近江八幡、西陣、馬籠、奈良井……数ヶ年の間に、相当数の場所が記録された。

また、この時期、社会現象としても同様の事情を見ることが出来る。外国人観光客の増加、レジャー、余暇産業の普及、旅立ちへの宣伝文句等によって、都市からの脱出、自然への回帰、見知らぬ町、見知らぬ人々との出会いを求めての観光旅行が一種のブームであった。「ディスカバー・ジャパン」はその象徴的な文句であった。京都、倉敷、高山等の古い町には観光客がどっと訪れることになった。それにとまなつて、歴史的町並み、家並みが整備、保存される事情も生じた。西欧化という名の近代化路線をひたすら歩んできた我が国にとって、これは確かに大きな出来事であった。しかし、この時期に行なわれた前述のデザイナーサーヴェイは、数多くの実測図面を記録として残すことにはなったものの、それらを今後の町づくりへと結びつけるための明確な問題意識と方法を

もつまでには至らなかった。何のために調査するのか、過去への単なる郷愁だけではないのか、幾つかの批判のなかにブームは去って行った。

しかし、一種のブームで終わったかに見えるデザインサーヴエイではあったが、また、六〇年代後半の社会現象ではあったが、それらの行為は、アカデミックで形式的な動きとは異なったもう一つの動きとして、本文の冒頭に記した法令の制定、条例の制定等、行政機構改革への糸口、町並み概念の検討と、様々な影響力をもった動きでありえたと思うのである。また、その発言の場でもあったジャーナリズムの果たした役割も見逃すことができない。

七〇年代に入ると、日本経済の高度成長も行き詰まりをみせ、市民の間にも乱開発で混乱をきわめている足下の生活環境を見直す気運が出てくる。量より質を重視する考え方が社会の中に定着しはじめる。産業開発による公害問題、交通機関等による騒音、低層居住地における高層ビル建設にともなう日照権問題、等々が議論される。また、都市計画的スケールの問題も大きくクローズアップされてくる。都市の防災、居住環境の整備、オープンスペースの設置、交通体系の見直し、等々が具体的な問題としてでてくるのである。個性ある伝統的な町並みを保存、活用することもこのような環境保全という脈絡をもって議論されはじめる。ジャーナリズムが保存問題を積極的に取り上げ、日本の生きている歴史的都市の実態を報道しはじめたのもこの頃である。単体の点としての文化財保存から、線的、面的な拡がりをもった環境保全の考え方も用意されつつあった。また、この時期から、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア等のヨーロッパにおける都市の歴史的研究、調査報告、保存行政の方法や思想が日本に

紹介され、利用されはじめたことも記しておかなければならないことのひとつである。

それではここで、この当時、私たちの時代と時代精神の建築的展開は、いかなる情景であったかを、68年創刊の月刊雑誌『都市住宅』のバックナンバーのテーマを概観することによって追跡しておきたい。

68年 転換する生活。パターン アメリカ草の根建築の研究
文化人類学の眼 69年 建築家なしの建築 ローコスト・ハウジングの追求 吹抜の方法論 70年 コミュニティ研究
人間・機械・共生系 建築教育の方向 71年 デザインサーヴエイ研究の総括 セルフエイド系の発見 緑の空間 72年
集住体の研究 生活史・同潤会アパート 町家共同研究 73年
集住体・都市の住居単位 様式としての都市居住 再開
発・固有の論理を求めて 74年 保存の経済学 隅田川悲歌
明治村案内 75年 保存から計画へ 町の見方 建売住宅団
地 中国・消費都市から生産都市へ——これが七〇年前後八
年間に及ぶ建築的テーマの変遷過程である。『都市住宅』誌
上で繰り広げられたテーマに限定されているとはいえ、この
ようにして振り返ってみると、ジャーナリズムが先見的に取
り上げたテーマの数々、創り出したムーブメントは今なお未
解決のまま展開をまわっているものも数多いと思わざるをえな
い。しかし、以上のような状況の数々は、着実な成果を生み
出しつつもある。

文化財保護法の改正に先だつ、一九七三年より、文化庁指
導のもとに、主として建築史家の手によって行なわれている
町並み調査もそのひとつである。この調査は、あくまでも行
政に結びつける目的で行なわれているのではないかと思われ
るが、国土庁、建設省等も参加していると聞いている。調査